BURRN! 2022年4月号　2022年3月5日発行・発売（毎月5日発行・発売）第39巻・第5号・通巻552号

BURRN!

THE WORLD'S HEAVIEST HEAVY METAL MAGAZINE

KISS

Exclusive Interviews

"OFF THE SOUNDBOARD 2004" OUT SOON!!

KORN

SMITH/KOTZEN

DREAM THEATER

HARDCORE SUPERSTAR

POSTER : TAYLOR MOMSEN (THE PRETTY RECKLESS)

+RESULTS OF READERS' POP POLL 2021

4

APR ◆ 2022

Gene Simmons(l.) & Paul Stanley [KISS]

EXCLUSIVE INTERVIEWS

KISS

GODS OF THUNDER AND ROCK'N'ROLL

秘蔵ライヴ音源シリーズ第2弾の発売を控えた地獄の軍団。
ジーン・シモンズ、ポール・スタンレーの両巨頭が、
結成50周年を前に語る現在と、歴史的瞬間の裏側。

by YOU MASUDA

all pix:JOHN "SHOOTER"HARRELL/BURRN!(USA)

interview[I]

GENE SIMMONS

秘蔵ライヴ音源が実証する「2004年のKISS」の素晴らしさと、現布陣に至った彼らが獲得したもの、そしてKISSファミリーから最初に逝った盟友がジーンとポールにもたらした重要な"気付き"の正体。

ジーン・シモンズ<vo,b>と話をする時に何よりも心掛けておくべきなのは、会話の主導権を彼に完全には譲渡せずにおくことだ。豊富な比喩と逸話を絡めながら進んでいくその話術に引き込まれてしまうと、いつのまにかこちらの聞きたいことではなく彼の話したいことだけをずっと被露されることになる。しかもこうしてコンスタントに取材の機会があると、ことに過去のことについては同じ発言が繰り返されるケースも多くなってくる。ただ、「またその話ですか！」と思っていると、かつてその言葉が発された時には伴っていなかったはずのニュアンスや、時世が今現在だからこその感情といったものが伝わってくることも多々ある。

今回もまさにそうだった。このインタビューは当然ながら秘蔵ライヴ音源シリーズの第2弾にあたる「OFF THE SOUNDBOARD: VIRGINIA BEACH 2004」に伴うものであり、同作の発売予定がなければ実現していなかった可能性が高い。しかし会話の内容は同作にまつわることのみならず、KISSが歩んできた約半世紀に及ぶ歴史のさまざまな地点へと移動を重ねながら進んでいった。

——まずは何より「OFF THE SOUNDBOARD: VIRGINIA BEACH 2004」に関して聞かせてください。音源を試聴しましたが、前回同様いわゆるオーヴァーダブや編集とは一切無縁であることがわかる生々しい音に興奮させられました。シリーズ第2弾としてこの音源をリリースする決め手となった理由はどんなところにあるのでしょうか？

ジーン・シモンズ（以下G）：サウンドの状態とバンドの調子が良かったからだ。力強くて気持のいい音だった。どんな家庭にも問題は付き物ではある。兄弟姉妹の仲違いなどもそうだし、どんな家庭、どんな結婚だろうと喧嘩は完全には避けられない。我々はエース（フレーリー／g,vo）とピーター（クリス／ds,vo）を死ぬほど愛しているし、彼らは間違いなく永遠にKISSファミリーの一員だが、彼らの在籍期には問題が絶えなかった。リハーサルに参加しなかったり、ドラッグや酒などをめぐる問題だらけだったり。そういうことがバンド、音楽、さらにはファンにも影響を及ぼすことになる。

2004年当時のKISSは、エリック（シンガー／ds,vo）とトミー（セイヤー／g）の加入によって……上手い比喩が思い浮かばないんだが、まるで医者から注射を打たれ、体内の血液すべてが綺麗さっぱりと新鮮なもの、生きる喜びに満ちたものに変わったかのようだった。この音源を聴いて、あまりのバンド・サウンドの良さに、思わず「これは多くの人に聴いてもらうべきだ！」と口走ったよ。ポール（スタンレー／vo,g）のヴォーカルは素晴らしいし、私自身もパワーと魅力に驚んでいる。しかもファンからも求められているからこそ、こうして出すことにしたんだ。ソウデスネ！（と、自らの発言の正しさを強調するかのように日本語で発言）

——2004年に行なわれていたのは「ROCK THE NATION TOUR」です。今回のヴァージニアビーチでの音源は同年7月に収録されたものですが、その直前にあたる5月末から6月初頭にかけてはその一環としての日本公演が行なわれています。その際に印象的だったのはセットリストがとても流動的で、選曲の自由度が高かったこと。新布陣になったことであなたやポールが、演奏をより純粋に楽しめているように感じた記憶があります。

G：それは事実だ。野球でもアメリカンフットボールでも、チームの誰か1人ではなく構成メンバー全員を重視しなければならない。たった1人のメンバーが落球してしまうと、それがチーム全体の敗北に繋がる。チームを信じ、毎回、毎試合勝つことに闘志を燃やすメンバーが揃っていてこそ成立するものなんだ。トミーとエリックには暗雲がまとわりついていることもなく、性格的な問題も皆無で、2人ともプロフェッショナル精神を持った、時間にも正確な人間だ。面白いことに、現在の4人の中には喫煙者が1人もいない。禁煙というルールを設けたわけでもないのに、たまたまそうなった。酒も煙草を吸わないし、酒も飲まないし、ラリったやつもいない。こんなにも真面目なバンドは歴史上いなかっただろうね。

——同年のジャパン・ツアーの際は"Love Gun"と"King Of The Night Time World"が交互にオープニング曲に配置されていましたが、北米ツアー時には"Love Gun"に固定されていたようですね。KISSが1曲目に演奏する曲としては、初期は"Deuce"、そして"Detroit Rock City"が登場してからはあの曲が定番といえます。考えてみれば、これはKISSの公式ライヴ・アルバムの歴史において"Love Gun"が1曲目に収められている初の作品でもあるわけなんですが。

G：テープを聴き返すまでは曲順に関して特に何も考えていなかったよ。実際に聴いてみると、レコーディング担当者達がサウンドに相当気を遣っていたことがわかる。熱意という言葉は使い古されているが、そこはやはり熱意の賜物だ。熱意をもって仕事に取り組めばそれは音に反映され、ライヴを観に来ている人達はそれを目で確認することになり、上手くいけばサウンドとヴィジュアルによって心が揺さぶられるだろう。それが最も重要なことで、それが素晴らしいライヴを作りだす。サザンオールスターズだろうとYOSHIKIだろうとみんな同じことだ。音楽を提示し、そこに感情を込めること。それによってファンの側が何かを感じ取ることになれば、そこで初めて我々は重要な何かを生み出すことに成功したといえるんだ。

——「ROCK THE NATION」というツアー・タイトルには何か特別な意味が込められていたのでしょうか？ MONTROSEに同名の曲があり、KISSのショウでは開演前にあの曲が流れることがよくありますよね？

G：飾り気がなくて良いタイトルだと思ったんだ。どういうわけか、みんなツアー・タイトルに凝りすぎるきらいがある。あまり飾らないほうがKISSならではの良さが出る。フランス料理のように、まずはワインを飲め、香りを嗅いで、口の中で転がすような気取ったのとは大違いで、KISSは肉とじゃがいものようなシンプルな料理なんだ。汚い言葉を使わせてもらうならば、そんな気取りは糞みたいなもんだ。そうしたくだらない要素はすべて省いてある。好きなものがあれば気取らずにリアルなままであるべきなんだ。「ROCK THE NATION」という言葉はKISSという存在、KISSが成し遂げようとしていることをリアルに表現していると思った。当時は、さまざまな新しい音楽が出始めた頃でもあった。EDM、エレクトロニック・ミュージックの初期でもあった。それはそれで良かったんだよ。ただ、KISSは肉とじゃがいもみたいなバンドなんだ。気取らず、飾らない。そして「ROCK THE NATION」は間違いなくKISSらしいタイトルだ。少なくともRADIOHEAD向きではない。想像してごらん。「さあ、RADIOHEADの登場です。ROCK THE NATION！」なんて言われても「はぁ？」って感じでイマイチだろ？

——ええ、まあ。で、ライヴの開演前に同タイトルの曲をかけているのは？

G：最高だからだよ。シンプルなギターにヴォーカル、タマを殴られたかのような熱いのあるドラム、そして肋骨をガタガタと振動させるベース。飾り気が一切なく、人生の意味を問うような歌詞でもない。人間の存在の意味やら深いテーマについて知ったかぶりするようなミュージシャンというのが、たまにいるよね。食べ物と一緒だ。日本食はアメリカの食文化と似通っているところがあると思う。しかしアメリカとヨーロッパの食文化は大いに違う。ヨーロッパ人は上品であることにこだわるが、アメリカ人は味が良ければ何でもいいんだ。大きな違いだよ。ホットドッグやピザなどの美しい料理はアメリカ発祥と言っていい。飾って食べる必要がない。ハンバーガーもしかり、スターバックスもそうだ。だ

けどフィレミニョン、つまりフランス風のステーキを食べる時はフォーマル料理だからドレスアップしなきゃいけない気になる。ヨーロッパの王や王妃に出す料理なんだから、そりゃフォーマルさ。ただ、アメリカには王や王妃など存在しなかったからね。だからアメリカの食文化は楽しいんだよ。急いでいる時はテーブルに着くこともなく、ホットドッグの買い食いができる。だからまあ、特に深い意味はなく、重要なことを追求しているわけでもなく、「人生短いんだから、少しぐらい楽しんだほうがいいり」って感じであの曲をかけているんだ。

——2004年当時のセットリストには実にさまざまな時代の楽曲が網羅されています。終盤に登場する"Unholy"は、"God Of Thunder"や"War Machine"と並んで、あなたのテーマ・ソングのひとつとして認識されるべき90年代の代表曲のひとつになりました。この曲の持つダークでダーティなイメージというのはあなたのキャラクターを最強するのみならず、世がグランジ／オルタナティヴに席巻されていた時期に、新たな世代とKISSを繋ぐものにもなっていたように思います。

G：あの曲はドロ・ペッシュというアーティストのアルバム（DORO名義で1990年に発表された「DORO」）をプロデュースしたことが切っ掛けで生まれたんだ。ドロはWARLOCKのメンバーでね。本人はソングライティングが得意というわけではなかったので、アルバム用の曲を探してみたところ"Unholy Love"という未使用楽曲を私が見つけてきたんだ。（と言いながら歌い始める） こんな感じの良質なメロディの曲で、歌詞はそれに噛み合っていない気もしたが、彼女が録音したこの曲はアルバムの中でいい味を出している。しかもそこでギターを弾いているのがトミー・セイヤーなんだ。彼女のバンドは全員クビにした。ちゃんと演奏ができるミュージシャンを使いたかったんだ。そして、その曲との出会いを通じてunholyという単語が気に入ってしまい、"Unholy"を書き始めた。あの「ブーン、ブーン」という箇所はベースで作ったんだが、エルヴィス・プレスリーの曲からインスピレーションを得たものだ。そう、"Jailhouse Rock"だ。知ってるかい？

——ええ、勿論。さすがにそれぐらいは。

G：あの曲の出だし、わかるだろ？ あの「ブーン、ブーン」という繰り返し。そこから着想を得て、キーを変更して重い感じにして、それがあの曲が生まれる発端になったんだ。そのアイディアが見えた時点で、当時はまだ付き合いやすかったヴィニー・ヴィンセント<g>、つまりまださほど問題を抱えていなかった頃の彼に声をかけ、力を借りながらあの曲を完成させた。残念ながら現在の彼は当時よりもずっと多くの問題を抱えているがね。のちに（リユニオン後のライヴで）この曲をやろうとしたが、エースとピーターは……。彼らは結局、このバンドに二度ならず三度も復帰している。つまり三度にわたり違う時期に籍を置いてきたわけだが、いったいどれほどヘマを重ねればそんなことになるんだろうな？ 一度や二度でも酷いのに三度も復帰しているなんて普通じゃない。人生をやり直せるチャンスなんて何度も与えられるものではなく、せいぜい一度きりであるはずだ。とにかく、何が言いたいかと言えば、エースがいる間は"Unholy"をやりたくても上手くいかなかったということだ。彼は上手いんだけども音楽能力的にこういった楽曲に向いてはいなかった。彼があくまで初期の楽曲を得意としていたのに対し、"Unholy"はもう少し洗練されていたからね。

——当時弾いていたブルース・キューリック<g>は勿論、トミー・セイヤーにはそうしたタイプの楽曲にも適応できるということですね。ちなみに今年は、その"Unholy"が収録されていた「REVENGE」の発売30周年の年にあたり、同時にエリック・カー<ds,vo>の他界（1991年11月24日）から30年が経過したということでもあります。彼がこのバンドにもたらしたもの、貢献といったものについて、今、どう考えますか？

G：エリック・カーの出現は新鮮だったよ。どデかいドラム・サウンドとフレッシュな歌声。なにしろ彼は歌が上手かったからね。メンバーと同等、もしくは私も含めたメンバー誰よりも歌が上手かったかもしれない。でもいちばん大切なのは、何もないところからスタートした人物が同じバンド内にいることによって、自分がいかに幸運かに改めて気付かせてもらえたことじゃないかな。

たとえば午後1時からリハーサルがスタートする場合、彼はその何時間も前から入ってドラムを叩いているんだ。その姿から嬉しさがにじみ出ていた。それがすべてなんだ。自分の愛することをやっていれば、それはもはや仕事ではなく、その人にとっての喜びになる。天からの恵みかもしれない。そんなことができている人がこの世の中にどれだけ存在する？ 大好きなことをやって、それがお金になり、自分の子供を産みたいという女性にも囲まれ、さらに、さらに、さらに……。そうした恵まれた状況について、当たり前だと思ってはいけない。彼を見て、私とポールはそれを痛感させられたものだ。「我々はなんて幸運なんだ！ 夢があって、それを実現することができ、しかも熱いを失うことなく持続している。それを当たり前のことだと思ってはいけない」とね。そうした改めての気付きを、彼はバンドにもたらしてくれた。しかも当然ながらドラムの腕は素晴らしく、力強い歌声の持ち主だった。ただ、もしかすると彼がこのバンドにもたらした最大の貢献は、常に場を明るくする盛り上げ役的なあの性格によるところが大きかったかもしれない。とにかく前向きな男だった。他のバンドや誰かについて悪口を言っているのを聞いたことがなかったね。私なんかよりも、よっぽど人間ができていたように思う。

——「REVENGE」の発売30周年に際しては、何か特別なプランなどはありますか？

G：ないね。そうしたアニヴァーサリーを意識してくれているのはレコード会社やファンだ。我々ではない。賢い人間というのは、往復途中に後ろを振り返りはしない。まっすぐ前を見据えているものだ。KISSは常にそうしてきた。我々は前だけに目を向け、時間の経過というものを気にしていない。それこそパーティが盛り上がっていたら時間なんて気にせずにいるものだろう？ 実際、我々がこのツアーを終了する頃にはこの道を歩み始めてから50年になる。しかしそんな実感はないし、10年とか5年ぐらいにしか感じられない。

こうしてBURRNｩのインタビューを受けるようになってからすでに長いが、その前には「MUSIC LIFE」や「音楽専科」など他の雑誌があったし、水上はるこさんをはじめ、この仕事を愛してやまない素晴らしいジャーナリスト達が日本にはいた。誰もがその仕事に熱中していて、それを単なる仕事として捉えていなかったように思う。そういうのを求めているんだよ。日本のプレス、ロック雑誌の素晴らしさは、作り手自身が自分の仕事を愛していることがうかがえるところにある。水道業者や歯医者だと、そんなことにはならないだろうがね。（笑）

——ありがたい言葉として受け止めておきます。ところで「REVENGE」は、「DESTROYER」や「THE ELDER」を手掛けていたボブ・エズリンのプロデュースによるものでしたね。昨年は彼との最初のタッグ作にあたる「DESTROYER」の45周年にあたり、それを記念してのリイシュー作品も話題を集めました。あの作品はKISSの音楽的な多面性を引き出し、ライヴ・バンドとしての巨大さに相応しいスケール感を伴った最初の作品になったと思うんですが、現在のあなたはあの作品についてどのように自己評価していますか？

G：今まで発表してきた中でいちばん好きな作品のひとつが「REVENGE」、そしてもう1枚が「DESTROYER」だ。ただ、同時に、バンドがただただ自分達らしくやっている最初の3枚も好きなんだ。当時の自分達そのままの演奏であり、そのままのサウンドだったからね。しかし音響技術がなっていなくて、まるで誰かが客席のどこかでテープレコーダーを回して録音したかのような代物だった。まさにそんな感じだったな。

実のところ、最高なサウンドのアルバムを作っておきながら、ライヴでそのクオリティを維持できずにいるバンドは多い。つまり作品がオーヴァー・プロデュースということだ。アルバムに惚れ込んでいても、いざライヴを観てみるとがっかりさせられることが多々ある。我々の最初の3枚を聴いたうえで当時のライヴに来ていた人達は、ライヴならではの特殊効果や派手な演出がプラスされつつも、あのサウンド自体が健在であることに気付いていたはずだし、そこには我々の誠意を感じてもらえていたはずだ。そして「DESTROYER」で初めてボブ・エズリンが制作に加わった時、我々はひとつのチャレンジを迎えていた。なんせピアノやコーラス隊の導入もあれば、速度を落としてみたり上げてみたりというのもあったし、コンセプト・ソングという初の試みもあった。そうして作られた音像を、事前に録音した音源やサンプリングを使わずにライヴで再現できるようになるまでには時間がかかったものだよ。

そして後年、「REVENGE」の制作に入った時は……実は、ボブとはその前から、映画に使われた"God Gave Rock 'N' Roll To You II"の制作でも仕事をしていた。（1991年制作のアメリカ映画「BILL & TED'S BOGUS JOURNEY（ビルとテッドの地獄旅行）」で使用され、サウンドトラック盤にも収録） そんな時分に、バンドに変化が訪れた。ご存知のように、エリック・カーが……。

当時、彼の癌はかなり進行していた。ニューヨークで入院中だった時に、みんなで見舞いに行ったよ。その時、自分の死期が近付きつつあるのをすでに知っていた彼は、あの曲のビデオ・シューティングに参加させてくれと懇願してきた。自分をロサンゼルスに行かせてくれ、とね。それがまさに、彼の意思だった。実のところスタジオ・レコーディングはエリック・シンガーの手によってすでに行なわれてい

アニヴァーサリーは大事だが、1人で祝う記念日ほど悲しいものはない。ファンに受け入れられるかどうかに、自分達が生きるか死ぬかがかかっている。ファンの存在なしには、我々には何もできやしない。

た。だけどもエリック・カーは、亡くなる数ヵ月前のビデオ撮影の場で全力で演奏してみせたんだ。末期癌の痛みは相当なものだったはずだが、そんな素振りは微塵もみせず、なんとかやり通したんだ。そして、我々があのアルバムに向けてのソングライティングを開始したのはその直後のことだった。当時、かなりの打撃を受けていたのは間違いないが、どんなに悲しいことであろうと、何かの終わりは何かの始まりを意味することが多い。そして実際、そこでエリック・シンガーが参加することになったわけだ。のちに加わったトミー・セイヤーに関しても、いまさら改めて説明するまでもないだろう。そもそもトミーはKISS加入前からスペースマンだった。彼は確かALIVEという名前のトリビュート・バンドにいたことがあるんだ。

――いいえ、COLD GINですよ。

G：そうだった。そのバンドで日本ツアーもしたことがあるようだし、あちこちでライヴをしてきたようだ。実際にトミーと出会ったのは彼がKISSツアーの前座を務めていたBLACK 'N BLUEのメンバーだった時だ。彼自身から彼らのアルバムのプロデュースを依頼されたんだ。BLACK 'N BLUEのアルバムは2作プロデュースしたよ。(第3作の「NASTY NASTY」と、続く「IN HEAT」。発売はそれぞれ1986年と1988年) どちらも気に入っている。同じ頃、E・Z・Oという日本のバンドのプロデュースもしたことがあるが、あのデビュー・アルバム(1987年発売のセルフ・タイトル作)には素晴らしい内容が詰まっていて、私としても自信作なんだ。バンドと一緒にスタジオにこもって作った作品だ。

それはともかく、『REVENGE』の制作当時、ボブ・エズリンとスタジオ入りした段階ですでにギターをそれまで以上に前面に押し出し、よりハードなサウンドにしようと決めていた。ボブにとって最大のチャレンジは、エースとはギター・スタイルがまったく異なるブルース・キューリック、そしてピーター・クリスと演奏スタイルが異なるエリック・シンガーとの関わりだった。かつて彼が手掛けたKISSとは4人中2人が違っていたわけだからね。それでもKISSらしいサウンドに仕上げなければならなかった。KISSらしさを失うことなく、なおかつ代わり映えしないものにもすることなく、新鮮なサウンドを作り出すこと。それが最大の挑戦になったんだ。だから当然のように時間もかかったし、時間をかけながらさまざまな決断を下していった。ただ、その甲斐あって個人的にもすごく好きな曲の多いアルバムになった。"Domino"や"Unholy"、そして勿論"God Gave Rock 'N' Roll To You II"も入っているわけでね。勿論、1stアルバム当時からすれば音もだいぶ変わった。長年やっていれば、音は進化していくものだからね。たとえばMETALLICAがいまさら『MASTER OF PUPPETS』みたいな新作を出すわけがないのと同じように。

――ええ。いつのまにか『REVENGE』の話になってしまいましたが、『DESTROYER』のためにポールが書いた"God Of Thunder"について聞かせてください。あの曲はボブ・エズリンの判断によりあなたが歌うことになったんですよね？ これはファンの間でも有名なエピソードですが。

G：はっはっは！(かなり愉快な本気笑い)

――ポールはその判断が下された際、とてもショックを受けたという話ですが。

G：相当な。(笑) ただ、実際あれは正しい判断だったと思う。というのもポールは"雷神"とか"無慈悲"なんて言葉の並ぶ歌詞を歌うべきキャラクターではない。性分に合わないはずだ。たとえば19歳ぐらいのマドンナが"Like A Virgin"を歌うならばぴったりだと思うが、MOTÖRHEADのレミーが「まるでヴァージンのようね 初めて触れられた時みたい」なんて歌うべきじゃない。彼が歌ったらナンセンスだ。歌詞とメロディと曲のスタイルは、歌い手と噛み合っていなければならない。声というのは魂のない楽器ではないんだ。演奏者が楽器と一体であるべきなのと同様に、歌い手もまた歌と合致しているべきであり、聴き手に考える隙を与えてはいけない。「私は雷の神、信じざる者は罰るが良い。夢の中で知らしめてやろう」などと歌っているわけだからね。

――ええ、実にあなたに似つかわしい世界です。『DESTROYER』と同様に『ROCK AND ROLL OVER』も昨年、発売45周年を迎えました。同作については『DESTROYER』のような大掛かりなボックスセットなどは登場しませんでしたね。もしかして、この先にプランされているんでしょうか？ そうこうしているうちに今年は『LOVE GUN』の登場から45年ということになりますが。

G：今の質問に対する回答はYESとYESだ。この先にも多くの予定が控えている。ラスヴェガスでは「KISS WORLD」が開催されるし、KISSの映画の公開予定もある。さらにはKISSのカートゥーンの計画もあるんだ。いろいろとプランニングされているよ。

――さまざまな計画が目白押しなのは大歓迎ですが、何よりも待ち遠しいのはツアーの再開です。この先の状況変化が気になるところですが、今後、「END OF THE ROAD」という最終ツアーはどのような形で、いつ頃まで続くことになるのでしょうか？

G：50周年を迎えたら終わりにするよ。とはいえ、まだ100都市ぐらい残っているかな。4月は南米のベースボール・スタジアムを回る。ニッポン(彼はJAPANではなくこのように発音)に行くことも待ち遠しく思ってる。正直、世界中で最も好きな国のひとつだ。人々は優しいし、伝統文化も新しいカルチャーも、どちらも豊かな国だ。多くの国と違い、日本は自国の伝統芸術をはじめ、すべてに誇りを持っている。街なかにいる若者達の関心がTHE YELLOW MONKEYやB'zに代わる世代の最新バンドやトレンドばかりではなく、伝統的な文化や芸術にも等しく向けられている。過去は、無視してはいけないものだ。しかし残念ながらアメリカ人の中には自分達の歴史をあまりにも知らない人が少なくない。今現在にしか興味がない人達がね。TikTokやインスタグラム、今現在の情報にしか興味ない。歴史よりもキム・カーダシアンやカイリー・ジェンナーのこと、リップグロスの新色に詳しいというわけだ。

――今、さらりと口にしていましたが、今回のツアー中、もう一度日本にやって来る可能性はあると考えていていいんですね？

G：間違いない。日本へはまた行くよ。

――それは読者にとっても朗報ですね。ちなみに今年は、初来日公演実現から数えて45周年にあたる年でもあります。

G：アニヴァーサリーは大事だが、ひとりで祝う記念日ほど悲しいものはない。世界中で数百万人が音楽イベントを通じて共に45周年を祝ってくれるというのは、我々にとって最高の名誉だ。ファンがいるからこそ、やりがいがある。いちばん悲しいのは、ステージ上で心情を吐露しているのに観客が皆無という状態になることだ。ファンに受け入れられるかどうかに、我々が生きるか死ぬかがかかっている。我々には、ファンがいなければ何もできやしない。それがいちばん大切なことだ。

YOSHIKIと一緒に過ごした時に、泣きそうになる話を聞かせてもらったことがある。幼少期の彼はクラシック・ピアノを学ばされていた。お母さんが普段から着物を着ているような保守的な家庭で育ったYOSHIKIが8歳ぐらいだった時の話だ。あまり細かいことは言えないが、お父さんは問題を抱えていたらしく、YOSHIKIには心の拠り所がなかったらしい。そして10歳ぐらいの時、お母さんに連れて来られた武道館でKISSを観たらしい。それまでKISSの存在すら知らなかった彼は、戸惑ったようだ。ただ、彼は言っていたよ。それは彼自身にとってまるで悟りを開くような、まるで宗教をしるような体験だった、と。

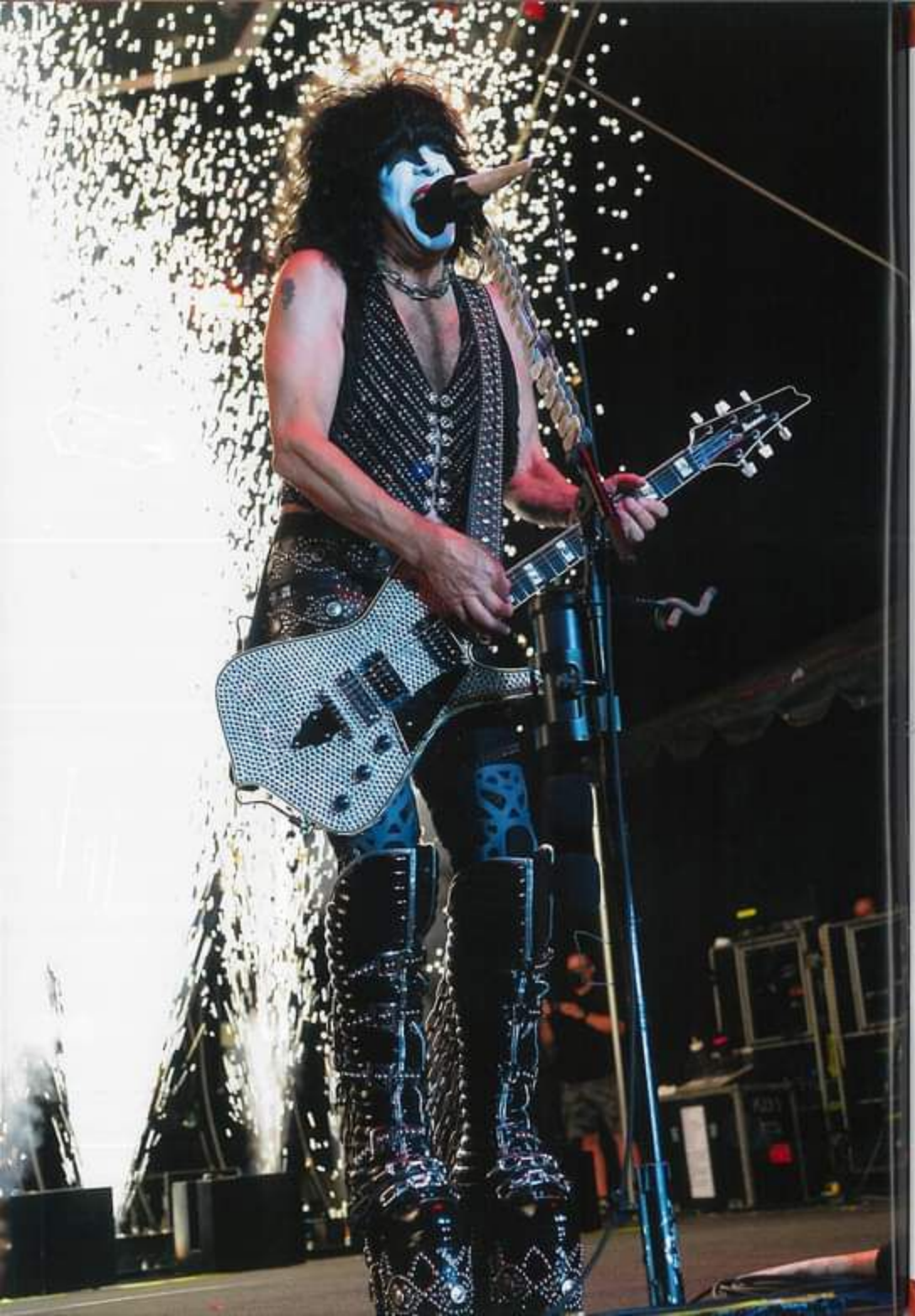
そして、ライヴを経験したことによって彼は理解力が深まり、強くなり、高揚感をおぼえ、インスピレーションを受け、今では多くのことを成し遂げるまでになった。それが何よりも大切なことなんだ。リレーのようなものだ。バトンを手に一心不乱に走るんだが、永遠に走り続けるわけにはいかないから次の走者にバトンを渡す。それと同じようにKISSもできるだけ遠くまで走り続けたら、そこで次の誰かにバトンを渡し、多くの人にインスピレーションを与え続けてもらいたいと願っている。YOSHIKIの場合は日本国内で多くの若い命を救ってきた。それは事実として知っているよ。なんせビデオで観たからね。彼はその人間性と音楽をもって自殺願望に悩む人々、特に若い女性を救ってきた。医者よりも宗教家よりも断然役立っているわけだ。そしてこの先は、自らの使命としてできるだけ遠くまで走り続け、そのうえでバトンを彼の次の世代に渡し、リレーを続けて欲しいものだと思っている。なんせ、誰かひとりが永遠に走り続けるわけにはいかないからね。

我々は、この地球を、自分達が生まれてきた時より少しでもマシな状態にしてからこの世を去りたいと思っている。我々に限ったことじゃなく、ファンのことを少しでも気にかけている人は誰だって、そうやってこの世を去りたいと思っている。永遠に生き続けることは不可能だが、人々の人生に少しでも変化を与えること、少しでも気分を良くしてあげることができれば――。それによって束の間、治療のことを忘れさせてあげられたり、飽きもちなガールフレンドに怒鳴られていることを忘れさせてあげられたら、2～3時間ほど魔法のようなひとときを提供してあげることができたなら、それでいい。生きている時間を提供してあげることができればね！ 生きていることを喜び、祝うんだ。それがいちばん大切なことだ。

宗教的なイベントに行ってもお祝いをするような気分にはなりにくいし、どこか悲しげな雰囲気だから憂鬱な気分になる。政治家はシリアスな話ばかり。じゃあどんな時に人生を祝うべきかって？ スポーツ・イベントでそういう気分になることはたまにある。でも野球観戦はみんなで野球の歌に声を合わせる機会ではないし、試合を観ながら足でビートを踏むこともない。だが、KISSを観に来てもらえれば、そういう気分を楽しんでもらえるはずだと私は思いたい。仮にKISSのことを知らなくても、1曲も聴いたことがなかったとしても、実際にライヴに足を運んでもらえたなら、忘れられない体験になることは間違いない。

――それは僕も保証しますよ。今日はお時間をいただき、ありがとうございました。

G：(日本語で)ドウモ！



interview[Ⅱ]

PAUL STANLEY

それまでのKISSに欠けていたものを獲得し、伝説を賛美しながら前進することが可能な状態になった瞬間。それが2004年だったとスターチャイルドは語る。その言葉の真意と、現在の彼の心情を探る。

ポール・スタンレーとZOOMを通じて話をすることができたのは、日本時間の2月5日のこと。同様の形式でジーンから話を聞いた2日後のことだった。アメリカ西海岸の現地時刻は夕刻だが、こちらは午前中。その時差について把握しているのか「オハヨウゴザイマス」と言う彼の表情はきわめて明るく生気に満ちていて、なんだかこちらにまでそのポジティヴな活力が分け与えてもらえているかのような気分になってくる。そして実際、KISSを愛するすべての人に彼はそうした作用をもたらし続けてきたのだ。何故ポールにそれが可能なのか？それは彼自身も、最初は"こちら側"に居たからである。

――本誌では、昨年春にSOUL STATIONの話、そして「OFF THE SOUNDBOARD」シリーズの第1弾となった「TOKYO 2001」に関する話をお聞きした際以来のインタビューとなります。

ポール・スタンレー（以下P）：そうだったね。

――それから1年経たないうちにこうして近況をうかがえることを嬉しく思います。昨年12月に肩の手術を受けたそうですが、術後の経過はいかがですか？　それもやはり長年のライヴ・パフォーマンスによる負担からくるものだったのでしょうか？

P：そのとおりだよ、まさしく。アスリートとは早めに引退するものだ。僕はミュージシャンであるばかりじゃなくアスリートでもある。そしていつも身体を極限まで追い込んできた結果、時折そのチューニングが必要になるんだ。

――ツイッターなど見る限り、ロードバイクを乗り回していたりしてすこぶるお元気そうですが、それは普段から体調維持のために？

P：実は今日も自転車で25マイルほど走ってきたんだ。できる限り週に3日は乗るようにしている。良い有酸素運動になるし、心臓が鍛えられるからね。肩が回復すれば、ウエイト・トレーニングにも戻ることができる。とは言いつつ、僕はいわゆるジムおたくとは違うからね。（笑）　筋肉を鍛えるとか、そういうことにあまり入れ込まないよう心掛けているよ。だから体重計に乗ることもない。体形維持ができている時にもそれを自覚できているし、逆にパンツがきつく感じる時は体重計に乗らなくてもわかる。（笑）　健康に気を遣ってはいるけれど、ハマリ過ぎるのは良くない。それはむしろ不健全なことだよ。

――確かに。そして去る1月20日、あなたは70歳の誕生日を迎えました。おめでとうございます。どのようなお気持ですか？「Don't trust over 30」などという昔ながらの決まり文句もありますが、70歳になってもロックン・ロールし続けるということについてはどのように感じていますか？

P：クレイジーだよ。（笑）　自分がこんなに年を取ったってこと自体が信じ難いけど、それは事実ではある。老いとはやはり経験してみないとわからないものだね。若い頃に想像していたものとはまるで違う。年を取るまでは実際にどんな感じになるのかなんてわからないものだ。他人を見ていて、老いの悪い面ばかりが目に付いてしまうというのはありがちなことなのかもしれないけど、僕の場合は「自分の頭がおかしいのか？　昔とまったく変わらない服装のままでいるのに」という感じで、信じられない気持になる。「年齢とは単なる数字に過ぎない」と言う人もいるよね。それが正しいのかどうかはわからないけど、僕自身の気分は爽快だよ。時間を止めたいとは思うけど、そういうわけにもいかないからね。

――実際、年齢よりもずっとお若く見えますし。

P：ふふっ。それはありがとう。

――今回何よりもお聞きしたいのは「OFF THE SOUNDBOARD：VIRGINIA BEACH 2004」に関することです。今回、シリーズ第2弾としてこの音源をリリースする決め手となった理由はどんなところにあるのでしょうか？

P：トミーが加入してからまだ日が浅かったこの当時は、KISSにとって重要な節目の時期だった。バンド内に満ちていたエネルギーと興奮によって、僕達はより優れたパフォーマンスを披露することができるようになっていた。楽しさからは程遠い時期を抜け出したばかりだったし、そうした日々の記憶を蘇る必要があったんだ。正直なところ「こんな惨めな思いはもうたくさんだ、KISSなんて解散してしまえ！」という気持になっていたことさえあったよ。だけどファンは解散を求めていなかったし、ならばKISSを改善させるにはどうすべきかと考えた時、新メンバーが必要だと理解した。トミーはバンドに加入してから17年、いや19年になるのかな？エリックとはそれ以上に長く、かれこれ30年も一緒にプレイしてきた。それ以前のKISSに欠けていた情熱と正確な演奏をもって、過去を賛美しながら前進することが可能なラインナップをようやく揃えることができた。その現実に当時の僕は興奮していたんだ。

――2004年といえば「ROCK THE NATION TOUR」の年。今回の音源が収録されたヴァージニアビーチ公演の直前にあたる5月末から6月初頭にかけ、その一環としてKISSはジャパン・ツアーを行なっています。その際に印象的だったのは、その新ラインナップになったことであなたやジーンが、演奏をより純粋に楽しめているように見受けられたことでした。まさに今あなたが抑っていた喜びが伝わってきたものです。

P：あぁ……。思わず溜め息がこぼれてしまうね。僕からすれば、「やらなければならない」からではなく、「やりたい」からこそ割れてしまった破片をかき集め、跡を掘げて前進できたことに元気づけられたし、それが喜びでもあった。未だにそれは変わらないよ。「ポール、あなたはステージでいつもニコニコ笑っていますね」と言われることがあるけど、それは心底楽しんでいるからこそなんだ。それがバンドの音楽に、演奏に、そしてバンド内のケミストリーに反映される。2004年は我々にとって、そういう時代への出発点だった。

――そのジャパン・ツアーの際はセットリストも臨機応変なところがあり、オープニング曲も"Love Gun"と"King Of The Night Time World"が交互に演奏されていましたが、北米ツアー時には"Love Gun"に固定されています。"Love Gun"を1曲目に持ってきた時の感覚の違いというのはありますか？　ファンからすれば、1曲目にこの曲が登場すると「ショウの後半でポールが空中移動するパフォーマンスはどうなるの？」と思ったりするわけですけど。

P：絶好調な状態にあった僕らは、きっといろいろと変えてみたくなっていたんだろうね。当時はオープニング曲を長期的に定番化させるかどうかなんて決めていなかったけど、ひとつの意思表示として予想外な形でライヴを始めたかったんだろうと思う。"Love Gun"については観客の上を飛んで移動しながら披露するのが定番化していて、僕自身もセットの後半であの演出をやる際にはあの曲を歌うことを好んでいる。TVを観ているような気持になっている観客の目の前に、突然スクリーンから本人が飛び出してくるようなものだよね。なにしろそれまで客席からステージ上の僕らを観ていたのに、その僕が突然観客の中に飛び込んでいくんだから。そういう演出はセットの後半のほうがいいし、曲も"Love Gun"がいい。鉄板だし、KISSの伝統のひとつでもある。「とりあえず何か変えてみよう」程度の気持で、決まりごとを変えるべきではないと僕は思っている。

KISSのライヴは定番曲が多いって？　そりゃあ多いさ。何故なら間違いがないし、そもそも観客の95%は知っている曲を聴きたいんだよ。「こんな曲、知らないな」みたいな曲は求められていない。そういうのを好む観客がついているバンドも存在するのかもしれないけど、KISSのお客さんは違う。KISSのライヴでは大多数の観客が望んでいるものを提供する。それは、つまりマイナーな曲ではなく、観客

にとって馴染み深い曲を大々的に取り上げるということだ。

――今作はKISSの公式ライヴ・アルバムの歴史において"Love Gun"が1曲目に収められている初の作品でもあり、そうした意味での新鮮さもあります。もしかしてこのライヴ音源を作品化することにした理由のひとつがそこにあるのでは?

P:いや、そういうことじゃない。この音源はバンドにとって非常に重要だった時期の音のスナップ写真みたいなものなんだ。繰り返しになってしまうけど、それがちゃんと音楽に反映されている。まるでKISSが生まれ変わったようだった、とまで言うと言い過ぎかもしれないけど、実際、ある意味そういう部分があったんだよ。ようやくエンジンが全開になったんだ。それ以前からエリックがバンドにいた時期はあったし、トミーがバンドにいた時期もあり、どちらも素晴らしかった。だけど実はKISSは2人を同時に必要としていたというわけなんだ。だからこそ、2人が揃ったことですべてが変わったのさ。

――ライヴ中、"Love Gun"で空中移動を経て客席フロア内のサブステージに向かう前、あなたはいつも「僕らかつては客席の側にいた。もっとみんなに近付きたい。そっちに行ってもいいか?」とオーディエンスに尋ねますよね。

P:ああ。

――KISSのライヴ・パフォーマンスが常にサービス満点なのは「客席の側から観てきた自分」としての視点を失うことなく、今も自分自身を納得・満足させるに足るものを提供しようとしてきたからでもあると思うのですが、いかがでしょうか?

P:そうだね。僕自身、誰かのライヴを観てがっかりさせられることが多かったからこそ、自分達のお客さんが満足できるライヴ作りをしたい。それが僕にとっての喜びなんだ。KISSは自分達がかつて「こんなバンドを観てみたかった」と思えるようなバンドに僕ら自身がなってやろうという姿勢で続けてきたんだ。そうしていくためには、自分が客席側にいた時の記憶を忘れてはいけない。わざわざお金を払って興奮して観に来てくれる観客を前にして演奏する時は、「演奏してあげているんだ」的な上から目線は厳禁だ。彼らに対しては最大級の敬意を払うべきだし、個人的には敬意を通り越したくらいの気持をもって臨んでいるつもりだ。僕らのことを愛してくれて、KISSのライヴを待ち焦がれている人達とともに過ごせるのは、僕にとって最大の喜びだといえる。そう、彼らの期待に応えることで僕自身も喜びを得ることができるんだよ。

――その"Love Gun"を表題曲とするアルバム「LOVE GUN」は1977年にリリースされています。ということは今年リリース45周年ということになります。昨年は「DESTROYER」のボックスセットなど大掛かりなリイシュー・プロジェクトがありましたが、この作品についてもアニヴァーサリー的な計画は何かあるのでしょうか?

P:実は現在、記念アルバムのシリーズ化を計画しているところでね。「DESTROYER」のリイシューに伴うパッケージ・デザインについては、素晴らしかったと言わずにはいられない。ブックレットも綺麗で、写真を眺めたり、読み進めたりしていくうちに、あのアルバムが本当に価値あるものだったんだなと改めて思わされた。「LOVE GUN」についてもそれは同じことだし、アニヴァーサリーに際してあぁいった特別なアイテムを作るというのは、自分達にとっても大事なことだ。

ファンや自分達のために作られたアルバムというのは、単なる楽曲集ではない。その当時の時間を切り取ったもの、さっきも言ったように、スナップ写真みたいなものでもあるんだ。人生のある瞬間が切り取られたものになっているから、そのアルバムを聴いたり、ジャケットやブックレットを眺めたりするだけで、その時分のことを思い出さずにはいられなくなる。KISSファンの大半も、僕らのアルバムを手に取っただけで、それを初めて聴いた時、もしくは昔にした瞬間のことを思い出すんじゃないだろうか。そのアルバムは自分にとってどういう意味を持っているかも含めてね。だから楽曲だけを残すんじゃなく、そうやって特別なものを提供し、アニヴァーサリーを一緒に祝うことができるのは最高に嬉しいことだ。

まずは自分が納得いく作品であること。そういうものを作ればきっと他の人も喜んでくれるはずだと昔から思っていた。だからさっきも言ったように、僕らは「自分が観てみたかったけど、観ることができなかったバンド」に自分達がなることに決めたし、「自分が憧れたバンドにしてもらえなかったことをファンに提供できるバンド」になりたかった。素晴らしいライヴを目指すだけじゃなく、たとえばカッコいいグッズを売ることにもいち早く取り組んできたけど、そうすることがクールだと考えてやり始めたわけじゃない。ただ、「Tシャツを売るなんてダサいし、やりたくない」とは思わなかった。単純に、ファンが欲しがっているなら提供しようじゃないか、という気持だったんだ。そこについての視点が他のバンドとはちょっと違っていたかもしれないね。

ところが、KISSのやり方が上手くいっていることに他のバンド達もいつしか気付き始めた。これは金儲けになりそうだぞ、とね。でも、さっきも言ったように僕らがグッズ販売を始めたのは「KISSのバックルが欲しいって? いいよ、作ってみよう」みたいな気持からでしかなかったんだ。KISSと同じ制服を着ているような一体感を、みんなに味わって欲しかった。ファンが「大好き!」という気持を素直に表現することがダサいと思うような他のバンドの気が知れなかったな。だから当時から、それなりに中傷も批判も受けていたよ。だけど最終的にはみんなその重要性に気付いて真似をし始めた。ただ、途中は僕らとは違う理由で始めたんだと思う。僕らがグッズに力を入れ始めた当初は、それがいずれお金になるなんてまったく気付いていなかった。勿論、結果的には大きな収入源になったけど、始めた当初はファンの要望に応えていただけのことだったわけでね。

――ええ、わかります。ところで"Love Gun"という楽曲タイトルについては、1977年という時代背景もあって「英国のパンク・ムーヴメントに対するKISSからの回答」、つまりSEX PISTOLSへのアンサーだったという解釈が一部で定着していましたよね。また、この曲の歌詞をあなたがツアー時の飛行機移動中に書いたとの話もあります。実のところはどうだったんでしょうか?

P:アルバート・キングの"The Hunter"という曲から来ているんだ。歌詞の一部は"Ain't no need to hide/Ain't no need to run/'Cause I've got you in the sights of my gun"(隠れる必要はない/走る必要もないさ/俺はすでにおまえを銃で捉えている)というLED ZEPPELINの"How Many More Times"の歌詞からインスパイアされたものだ。あれがずっと頭に残っていてね。

ニューヨークのクイーンズに住んでいた頃、あるバンドの演奏を観たんだ。公園でね。どうやって電源の確保をしていたのかはわからないけど、機材のセッティングをしていた彼らは見るからにLED ZEPPELINに憧れてバンド活動をしているのが明らかだった。そこで彼らは、"The Hunter"のアップテンポ・ヴァージョンを演奏し始めたんだ。そのこともまた頭に残っていてね。そしてある時、飛行機移動中に新しい曲について考え始めていた際に、ふとその四方のことを思い出した。ただ、原曲のアイディアとコンセプトが気に入っていたけど、歌詞をそのまま盗むわけにはいかない。曲自体はフライトが終わるまでにほぼ完成したよ。その場でギターを手にすれば、すぐにそのまま弾けるぐらいの状態にまでまとまっていたね。その後、外部から運れてきたドラマーと共にレコーディング・スタジオに入り、デモを録った。その時はベースも自分で弾いているんだけど、実際のアルバム・レコーディングの時も僕がベースを担当しているんだ。

"Love Gun"は良い曲だね。名曲と言っていいと思う。僕は自分の書いた曲についても客観的になれるから、一歩引いたところから「これは良い曲だな」と評価することができる。変な話、クラブとかに遊びに行って「なんかいい曲がかかってるな。いいサウンドだな」と思ったら、それが"Love Gun"だったり"Detroit Rock City"だってことに気付かされたりすることも何度かあった。(笑)「おいおい、待ってくれよ。自分達の曲じゃないか」という感じさ。だから僕は、KISSの一員であると同時に自分達の曲のファンでもあるんだ。そして偶然にもそうした曲の多くは、名曲と言うべきものの大半は、この僕が書いているんだ。

――あなたの書いた象徴的な楽曲のひとつに"God Of Thunder"があります。「DESTROYER」のリイシュー盤には、あなたのヴォーカルによる原曲も収められていますよね。この曲は、そもそもあなたが自分で歌うために作ったものだったのに、プロデューサーのボブ・エズリンが「これはジーンが歌うべき曲だ」と判断し、実際そうなった。あなたは当時とてもショックを受けたようですが、正直なところどのような心境でしたか?

P:最悪な気分だったよ。(笑) 僕が歌っているあのヴァージョンは、あくまでラフ案に過ぎない。まだ曲として完成していない状態のものなんだ。KISSのステージでは、観客との掛け合い的なMCについても僕がリードを取っているし、自分としては「僕は歌の神だ!」と思う気満々になっていたから、できあがった曲をボブに聴かせた時には興奮していたよ。ところがボブが「良いね!」と言った直後に口にしたのは「この曲のヴォーカルはジーンだ」という言葉だった。唖然としたね。まさに打ちのめされた気分だった。

ただ、あのアルバムの制作時は、すべての最終判断をプロデューサーであるボブに任せるという方針にしていたんだ。そうしないと、僕とジーンがたび

あれこれと計画を立てても思いどおりに行かないのが人生というものだ。何もかもが日々変わっていく現況下においては、何とも言い切れないところが多々ある。ただ、どこかでけじめはつけなければいけない。

たび対立することになり兼ねないからだよ。だから結果、この曲についてもボブが判断を下すことになったし、その判断は間違っていなかった。あの曲はジーンが歌うべきであり、ボブの決断は完全に正しかった。僕自身にも、ある意味「ジーンの代表曲、彼の人格を表わすあの曲を手掛けたのは自分だ」という満足感がある。ジーンのヴァージョンは見事なものだし、ライヴでは「DESTROYER」に収録されたテイクを上回る素晴らしさがある。あの曲は、本当に彼そのものだ。要するに、ボブがいかに正しかったかということだよね。お互い関係が近すぎると、客観的に物事が見られなくなったり、「この曲は違うメンバーが歌ったほうがより相応しいものになる」といった判断ができなくなったりすることがある。当然、それはすごく難しいことではあるけどね。

――ええ。ただ、いずれにしても驚異的だと思えるのは「DESTROYER」のような完成度の高いアルバムを当時まだ20代半ばだったあなた方が作っていたという事実です。仮に当時のあなた方がその出来栄えについて有頂天になっていたとしても当然だと思えます。実際、当時はどんな手応えを感じていましたか?

P：あれは確か、23歳の時だったと思う。正直な話、今になって振り返ってみると、あの若さでよくあれほどの曲を書けていたものだなと自分でも感心してしまうよ。ボブは素晴らしかった。スタジオでの仕事ぶりは最高だった。僕らなんかとは比べものにならないほど知識が豊富で、KISSをさらに上のレヴェルまで引き上げようとしていた。

　僕ら自身も自分達のハードルを上げていくことになった。なかでも歌詞の内容も広げたことはひとつのチャレンジだった。"God Of Thunder"は、とてもじゃないけど、初期の自分には書けなかっただろう。「コンサートに行くはずだったのに、結局辿り着けなかった」みたいなストーリーの歌詞("Detroit Rock City"を指すものと思われる)を書くこともなかっただろうな。それまでにたくさん書いていた「女性ファンと仲良くなる」みたいな内容の歌詞から離れるよう、ボブから強く後押しされていたんだ。それがすごく良かったし、そこでたくさんの学びがあった。未だに作業をしている時にふと、「ボブだったらどうするかな?」と考えさせられることがある。それほど彼が最高だった、ということの証だと思う。

――なるほど。ところでKISSは2021年の時点からツアーを再開していますが、今後、「END OF THE ROAD」と銘打たれた最終ツアーはどのような流れを経ながら、どれくらい先まで続くことになるんでしょうか?

P：昔から、「あれこれと計画を立てても思いどおりに行かないのが人生だ」と言われてるよね。(註：ジョン・レノンの作詞・作曲による"Beautiful Boy (Darling Boy)"の歌詞の一節にそうした言いまわしがある)　だから、何もかもが日々変わっていく現在の状況下においては何とも言い切れないところがある。ただ、「ツアーの延期を繰り返すことは現実的か?」と問われれば、答えはNOだ。ある次元まで行ったら、「やむを得ない事情で予定を変更しなければならない」と言わざるを得ないだろう。現実には抗えないからね。なるべく流動的に対応しようとしても、1日には24時間という一定の長さしかないし、人生の年数にも限りがあるわけだから、いつかは「周りで起きていることに対応してばかりはいられない」という判断を迫られることになる。周囲の出来事に合わせて予定変更をしなければならない時もあるけどもね。

――コロナ禍が長引く中、ライヴ活動の終着点をいつにすべきか、計画どおりこれまでのような活動のあり方から身を引くべきかどうかということについて、考え方に変化はありますか?

P：いや、そこはまったく変わっていない。「END OF THE ROAD」の企画段階では、パンデミックという現実なんて想定もしていなかった。順調に進んでいれば、夏には本当の意味でのロードの終わり、つまり終焉を迎えていたはずだ。そりゃあ延期も可能だ。でも、どこかでけじめをつけなければならない。できれば多くの人にライヴを観てもらいたいし、かならず全都市を回ると約束したいところではあるよ。だけど各国が入国制限と制限解除を繰り返しているような状況では、どうにも動けないし、時間だけが過ぎていくことになる。そこで5年も10年もかけてお別れを引き延ばしていく気はないね。

　というのも、止めると言い出したのには理由があるからだ。ライヴが嫌いというわけじゃない。ただ、単純に、本当に大変なんだ。ライヴ自体は今も大好きだし、Tシャツとジーンズで演奏して構わないのなら90代になっても続けられるはずさ。だけど、22キロの衣装に身を包み、笑顔のまま走り回ってライヴ・ステージを大いに楽しむためには多くのことを強いられる。つまり、笑ってはいるけど大変な重労働でもあるということさ。だから、どこかで終わりにしなければならない。待ってくれている人達全員に会いに行きたいのはやまやまだけど、それは僕にとってコントロール外のことなんだ。

――負担が大きいことは重々承知しているつもりですが、今年はより活発な動きを期待していますよ。同時に、SOUL STATIONのほうについても、今年、そちらでの新たな動きはありそうですか?

P：勿論だ。多くのアーティストのプロデュースや楽曲提供を手掛けてきたカール・フォークと一緒に、新曲を完成させたばかりなんだ。多くのアーティストって、つまりKISSとは違うフィールドの人達ってことだけども。(笑)　彼はビッグ・ネームとの仕事が多いんだ。ミックスはセルバン・ゲネアが手掛けてくれた。最近では、ヒット・チャートのトップ15のうち、アデルの楽曲をはじめ13曲までが彼の手掛けたものだったことがあるくらいなんだ。彼はあまりにも多様なアーティスト達と仕事をしているから、逆に具体的に思い出せなくなるところがある。(笑)

　とにかく、僕はSOUL STATIONが大好きなんだ。多様なメンバーとの仕事がね。なんせ彼らはSOUL STATIONが動いていない時には、スティーヴィー・ワンダーからスモーキー・ロビンソンに至るまでのアーティストと仕事をしているような人達だ。そんな彼らが、いつだっていちばんやりたいのはSOUL STATIONだって言ってくれる。素晴らしいライヴ・バンドだし、僕自身もわくわくさせられているんだ。

――KISSのツアーが続いている中で、ふたたび日本にやって来る可能性は?　その可能性を信じているこの国のファンに向けて何か言いたいことはありますか?　ちなみに今年は、初来日から数えて45周年というタイミングでもあるんですが。

P：オハヨウゴザイマス。ワタシハポール・スタンレーデス。(と日本語で)　僕がみんなを愛していることは知ってるよね?　日本のファンとKISSは特別な関係にある。なにしろそれは45年前から始まっているんだからね。武道館から始まった君達との友情は、僕にとってかけがえのないものだし、僕らのニッポンに対する愛は言葉では言い表わせないほど大きなもので、今もみんなに会いに行きたくて仕方がない。最後にもう一度、共にロックン・ロールできることを切に願っているよ。

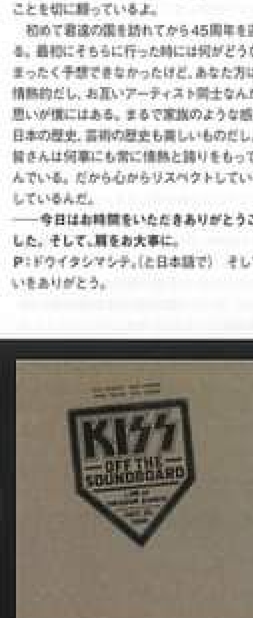
　初めて君達の国を訪れてから45周年を迎えている。最初にそちらに行った時には何がどうなるのかまったく予想できなかったけど、あなた方は本当に情熱的だし、お互いアーティスト同士なんだという思いが僕にはある。まるで家族のような感覚がね。日本の歴史、芸術の歴史も美しいものだし、日本の皆さんは何事にも常に情熱と誇りをもって取り組んでいる。だから心からリスペクトしているし、愛しているんだ。

――今日はお時間をいただきありがとうございました。そして、喉をお大事に。

P：ドウイタシマシテ。(と日本語で)　そして、心遣いをありがとう。■■

OFF THE SOUNDBOARD: LIVE IN VIRGINIA BEACH 2004

ユニバーサル　UICY-79923/4
3月11日発売



★同日頭も「オフィシャル・ブートレッグ」と形容している秘蔵ライヴ音源シリーズは昨年6月に発売された「OFF THE SOUNDBOARD：TOKYO 2001」を皮切りにスタート。同作は2001年3月13日の東京ドーム公演の模様を完全収録したものだったが、今回登場の第2弾は2004年7月25日、米国はヴァージニアビーチでの収録音源だ。当時の彼らは「ROCK THE NATION」というタイトルを掲げながらのツアーを展開中で、同年6月にはその一環としての日本公演も実施している。こうなってくると第3弾以降のリリース計画も気になってくるところだが、日本、アメリカと続いた先には果たして……?
★本作については今月号アルバム・レビュー欄もご参照ください。

5 DECADES OF INVENTION AND INVASION

結成からまもなく半世紀。KISSが経てきた画期的発明と世界侵攻の50年をディケイドごとに再検証。

文●増田勇一

50 YEARS AGO ◆ 1972
「KISS誕生前夜、不運な躓きから始まった逆転劇」

世界がパンデミックに見舞われていなければ、KISSは「END OF THE ROAD」と銘打たれたファイナル・ツアーを2021年夏には完遂していたわけだが、今年もそれは続き、さらには2019年12月をもって完結したはずの日本公演の歴史にも続編がありそうな気配が色濃くなりつつある。その終着点がいつ、どこに設定されているのかは今も不透明な状態にあるが、今回のインタビュー中、ジーンの口からは「50周年を迎えたら終わりにするよ」というヒントが示されている。

シンプルに「KISS」と題された彼らのデビュー・アルバムがアメリカで発売されたのは、1974年2月18日のこと。だからデビュー50周年という意味では、タイム・リミット到来までもう2年ほど猶予が残されていると解釈できる。が、当然ながらバンドはそれ以前から活動を始めていたわけで、KISSの歴史の起点はオリジナル・ラインナップの4人が出揃った1973年1月と見るべきだろう。ジーンとポールは1970年には活動を共にするようになり、1972年4月にはそこにピーターが合流。その後、バンド名をKISSと決め、「VILLAGE VOICE」紙に載せたメンバー募集広告によりエースが加わったのがその時点でのことだった。その瞬間を物語の始まりとするならば、ジーンの言う50周年到来のタイミングは来年1月ということになる。

こうして当時の経緯について振り返ってみた時に改めて驚かされるのは、4人の集結からわずか13ヵ月後に1stアルバムが発売されているという事実だ。そんな短期間のうちに曲を作り、バンド・サウンドを固め、ライヴを重ねながら契約を獲得し、アルバムを制作する。まだ20歳そこそこという若さの彼らにそんな芸当が可能だったのは、実はそこに至るまでにもそれなりに経験があり、アルバム制作も初体験ではなかったからでもある。

今から50年前、1972年の時点でKISSというバンドは生まれていなかった。が、その前身ともいうべきWICKED LESTERは1970年には始動している。しかもジーンとポールが合流する機会となったこのバンドは「Epic」と契約を交わし、アルバムまで制作しているのだ。ただ、バンドと同社の関係はあまり良好なものとはいえず、バンド側はギタリスト交代を契約条件として突き付けられたり、カヴァー曲の録音を強要されたりするなど、不本意な部分が多かったのだという。2005年にシンコーミュージックより刊行されているバンドの公認バイオグラフィ本「ビハインド・ザ・マスク」（デイヴィッド・リーフ、ケン・シャープによる共著）には、ジーンやポールのみならず当時の他のメンバーや関係者の証言も交えながら半世紀前の実情も綴られているが、その中でポールは、まだ同バンドが「スタジオに入ってレコーディングできるだけで嬉しい時期にあった」と振り返っている。

プロデューサーの計らいにより、ニューヨークの伝説的スタジオ、「Electric Lady」の空き時間を利用しながらデモ制作に勤しんでいたというエピソードは、QUEENの初期にも重なるものがあるが、アメリカでもイギリスでも同じような環境のもとで若い世代のバンドが自分達ならではのスタイルを築き上げるべく試行錯誤を重ねていたというわけだ。ただ、同書の中ではポールもジーンもWICKED LESTERについて"寄せ集め"という言葉で形容しており、一貫性に欠け、音楽性が定まりきっていなかったことを認めている。せっかく録音されたアルバムが発売されぬままお蔵入りになったのも、ポールによれば「ジーンと僕が権利を買い戻した」からだった。

WICKED LESTERのアルバム音源は非公式な形でも出回ってきたが、オフィシャルな形でもいくつか聴くことができる。2001年に発売された「THE BOX SET（THE DEFINITIVE KISS COLLECTION）」（邦題はその形状から「地獄のシガー・ボックス」とされていた）のDISC-1には、KISSの初期楽曲のデモやライヴ・ヴァージョンなどに加え、WICKED LESTER名義でのトラックも3曲収録されている。そのうち2曲はのちにKISSでも演奏されている"She"と"Love Her All I Can"だが、ファルセットによる歌唱主体でパーカッションやフルートまで聞こえる"She"はハード・ロック色の薄い仕上がりだ。また、ポールは"Love Her All I Can"を書くにあたってTHE WHOの"I Can't Explain"のイントロに触発されたことを認めている。そしてもう1曲の"Keep Me Waiting"は同バンド時代のライヴでも演奏されていたというポールのお気に入りの楽曲。ただ、この曲に限らずホーンの導入が目立ったアレンジになっており、そうした点も含めて彼はこの音源を気に入っていないのだという。

興味深いのは、3曲とも往年のモータウン系ヒット曲に通ずるような感触を持ち合わせていることだ。少年期にそうした音楽から刺激や影響を受けてきたことを彼ら自身も認めているが、実際、このあたりの楽曲がPAUL STANLEY'S SOUL STATIONによって再解釈されるようなことがあっても大きな違和感はないはずだし、それはKISSの初期楽曲の多くに通ずるところでもある。

結局、WICKED LESTERのアルバムは公式に世に出ることのないまま闇に葬られることになったが、そこでの悔しさが彼らを新バンド結成へと向かわせる原動力になった部分もあるはずだし、逆に当時の彼らが「Epic」との関係やアルバムの内容に満足していて予定どおりデビューしていたら、KISSの歴史が幕を開けることはなかったのかもしれない。つまりKISSが誕生したのはWICKED LESTERという下地があったからでもあり、それが短命に終わったからでもあるのだ。

若き日の彼らにとって、メジャー契約まで漕ぎつけたバンドが日の目を見ぬまま終わったことは大きな痛手となっていたに違いないし、おそらくジーンもポールも自分達の不運さを嘆いていたことだろう。しかしある意味、50年前の悲劇はKISS誕生のために欠かせない出来事だったわけである。DEEP PURPLEが「MACHINE HEAD」を引っさげて初来日したのと同じ頃、KISSはまだ誕生してさえいなかった。しかし彼ら自身はすでに最初の転機を迎えていたのである。

★WICKED LESTERの楽曲が録音されたオープンリール・テープの曲目表。KISSでもお馴染みの"Love Her All I Can" "She"のタイトルもみられる。バンド公認バイオグラフィ「ビハインド・ザ・マスク」より。

40 YEARS AGO ◆ 1982
「水面下での変容と、変わり続ける時流との対峙」

今から40年前、1982年当時のKISSもまた新たな転機を迎えつつあった。まず1980年にピーターが脱退。実のところ彼は前年の時点ですでにバンドを離れていたが、その事実が正式に報じられたのが同年5月。そしてブルックリン出身のエリック・カーがその後任に迎えられたことが伝えられたのが6月のことだった。当初はボビー・ロンディネリの加入が決まっていたが、正式発表以前の段階で彼自身がそのことを周囲に吹聴したことが発覚し、それによって採用が取り消しになったとの逸話もよく知られている。その後、ほどなくボビーがRAINBOWに加入していることは言うまでもない。

「KISS KILLERS」
(1982年)

「CREATURES OF THE NIGHT」
(1982年)

「LICK IT UP」
(1983年)

こうして結成後初のメンバー・チェンジを経たKISSは、1981年には過去に「DESTROYER」を手掛けた実績のあるボブ・エズリンとふたたびタッグを組んでアルバム制作に臨み、新体制での初作品であると同時にバンド史上初のコンセプト・アルバムでもある「MUSIC FROM "THE ELDER"」を同年11月に発表。ストーリー性を伴ったドラマティックな作品像はエズリン起用も相まって従来のKISSの作風を超越（もしくは逸脱ともいうだろう）するものになったが、一部では音楽的に高く評価されたものの、そうしたアプローチがかならずしもファン全般から歓迎されたわけではなかった。

そうした流れを経ながら1982年の5月に欧州、6月には日本で「KISS KILLERS」という作品がリリースされているが、ベスト盤に複数の新曲を加えたかのようなその構成内容は、楽曲自体の顔ぶれが充実しているとはいえ中途半端な印象を否めないものだったし、それが場繋ぎ的なアイテムであることは誰の目にも明らかだった。また、同時期にKISSは、初期から彼らのマネージャーを務めてきたビル・オーコインとの契約を解消し、自らのマネージメントを立ち上げていたりもする。

そして同年10月、バンドはマイケル・ジェイムズ・ジャクソンのプロデュースによる「CREATURES OF THE NIGHT」を発表。従来以上にHM色が強く、そうした舵の切り方は、その少し前に英国に発生していた新世代メタル・バンド台頭の流れ、いわゆるNWOBHMのムーヴメントに呼応した方向転換のようにも映るものだった。同作の全米アルバム・チャートでの最高ランクは45位で、KISSの作品としてはかなり低いものと言わざるを得ないが、UKチャートでは最高22位まで上昇している。また、全米75位止まりだった「MUSIC FROM "THE ELDER"」に比べれば成功だったといえるし、時流との付き合い方という意味においても正解だったことが、のちに裏付けられることになる。

そしてひとつ重要なのは、この時期のKISSにはエースがすでに不在だったという事実だ。彼は1982年3月に交通事故に遭っており、そのためレコーディングにも参加できない状況にあった。「KISS KILLERS」に収録されている新曲群でギターを弾いているのは、彼ではなくボブ・キューリックだ。そして「CREATURES OF THE NIGHT」では、全9曲中7曲までをヴィンセント・カサノなるギタリストがプレイしており、彼が作曲面でも多大なる貢献をみせている。そしてこの年の末にスタートした3年ぶりの北米ツアーにもエースは参加するとなく、前述のカサノがヴィニー・ヴィンセントの名前で代役として登場している。結果、1983年夏までエースの脱退が正式発表されることはなかった。

水面下ではこのような目まぐるしい動きがあったにも拘わらず、「CREATURES OF THE NIGHT」のアルバム・カヴァーにはエースの顔があるし、1982年11月にロサンゼルスで開かれた同作のリリース・パーティの場にも彼が姿を見せている。単純に、当時の彼がまだ契約上はKISSの一員だったからだ。とはいえ彼の心はすでにバンドを離れていたし、KISSはそのままヴィニーを後任に据えながら次なる作品を制作。それが1983年の9月末にリリースされた「LICK IT UP」である。

エリック、ヴィニーを擁する新体制での正式な第1弾となったこの作品のアルバム・カヴァーで、バンドは初めて素顔を公表し、以降はノーメイクでの活動に移行していくことになる。それは、すでにアメリカでもMÖTLEY CRÜE、QUIET RIOT、RATTといった"当時の新世代バンド"の台頭が進みつつあった頃でもある。あの時点でもしもKISSが従来のオリジナル・コンセプトに則ったスタイルでの活動継続にこだわり、そちらを選んでいたなら、完全に時代に取り残されることになっていたかもしれない。MTVとの付き合い方も違っていたことだろう。彼らはいわば、自分達の影響下にある世代のバンド達と同じシーンでの共存共栄を目指す道を選んだのだ。

ただ、そうしたある種の方向転換は「LICK IT UP」という作品を機に突然始まったものではない。70年代終盤にはディスコ・ブームさえ意識していた彼らの嗅覚は、80年代的なHMの流れもしっかりと捉えていたし、「LICK IT UP」での劇的変化が形になる以前に「CREATURES OF THE NIGHT」の時点で彼らなりに80年代を意識しながらヘヴィなアプローチを試行していたことの意味は小さくなかったはずである。

KISSの歴史における転機と言えば、誰もがまずはノーメイク時代の幕開けと、のちのオリジナル・ラインナップ復活を上げることだろう。ただ、彼らが80年代なかばに従来とは異なった独自のポジションを獲得することに成功できたのは、この1982年の動きにより新たな基盤作りができていたからこそだったのではないか。筆者にはそのように思えてならない。

30 YEARS AGO ◆ 1992
「紆余曲折を経ながらの本質奪還と、大いなる損失」

1992年、今から30年前にKISSが迎えていた転機は、それまでとはまるで種類の違う、誰にも予期できないものだった。この年の1月、三代目ドラマーとしてエリック・シンガーが正式加入している。その事実だけをみれば、ポールが現在言うところの「伝説を賛美しながら前進することが可能な」ラインナップになるための起点がそこにあったとも解釈できなくはない。だが、問題なのは彼がこのバンドに名を連ねることになった理由だ。1980年代のKISSのエンジンであり続けてきた前任者、エリック・カーの他界である。

彼が亡くなったのは1991年11月24日、何の因果かフレディ・マーキュリーが逝去したのと同じ日のことだった。同年5月、彼の心臓に悪性腫瘍が見つかった彼は、夏のあいだはずっと化学療法を受け続けていた。一時は回復傾向も見られたものの9月には脳出血に倒れ、そのままニューヨークでの入院生活を続けていた中での最期だった。

彼の闘病生活が始まったことによりKISSは「HOT IN THE SHADE」（1989年）に続くアルバム制作の開始を遅らせることになったが、1991年10月頃には、エリック・シンガーを代役に立てながらのレコーディング作業が開始されている。その年の5月、アルバムに先駆けて録られていたARGENTのカヴァー曲"God Gave Rock 'N' Roll To You II"においても、シンガーが代打に起用されている。この曲は映画『BILL & TED'S BOGUS JOURNEY（ビルとテッドの地獄旅行）』のサウンドトラック用に録音されたもので、KISSにとってはイギリスでの久しぶりのヒット・シングル（最高4位。アメリカではシングル・リリースされていない）となっており、当時のジーンはそのことについて「まったく期待していなかった予想外の出来事」だったと語っている。

また、エリック・カーは、闘病生活中ではあったものの、自身の強い希望によりこの楽曲のコーラスとビデオ・クリップ撮影に参加を果たしている。当然ながらその時点では、彼自身もバンドも彼の復帰を信じていた。それは、あくまで代役としてアルバム制作に参加したエリック・シンガーにとっても同じことだった。彼は1992年の1月下旬、筆者によるロサンゼルスでの取材の中で次のように振り返っている。

「バンドに入らないかという要請ではなく、あくまでエリック・カーが元気になって戻ってくるまで代役を務めて欲しいという話だった。実際、彼らはレコーディングを進めながらも、彼が何曲かに参加できるように手筈を整えていたんだ。ところが作業が進んでいくにつれ、彼の復帰が叶わない可能性が色濃くなっていった。俺は実際、自分のパートを録り終えてからは他のツアーに出ていて、彼が息を引き取ったことすら知らずにいて、戻ってきてからそれを聞かされたんだ。そして今年（=1992年）の初めに彼らから改めての接触があり、俺にKISSでの活動継続の意思があるかどうかを尋ねられた。そこでお互い長期的な視野を持っていることがわかって意気投合し、参加することを決めたというわけなんだ」

エリック・シンガーがKISSへの加入を決断した理由は他にもあった。幼少期からの憧ればかりではない。ジーンやポールがKISSでの活動に専念する意向を示したことも大きかったと彼は認めている。ポールはともかく、80年代後半のジーンは映画出演や他のアーティストの作品のプロデュース、自らのレーベル運営などで目まぐるしい日常を過ごしていて、ライヴ当日の会場到着も彼1人だけ常にギリギリというありさまだった。そしてエリック・シンガーは「彼ら自身も言っていたけど、またバンドとしての活動に専念するようだ。他のプロジェクトは脇に置いてKISSに集中することになっている」と語り、「だからこそ俺もここに来ることにした」と発言を結んでいる。

その際の取材現場には、ジーン、ポール、ブルース・キューリックも揃っていたが、誰もが異口同音に語っていたのは、エリック・カーに捧げるに足るものにするため、彼の長年にわたる貢献に報いるためにも素

★エリック・カー(本名:ポール・チャールズ・カラヴェロ)は1950年生まれ。ポールよりも年上にあたるが、可愛らしいと形容したくなるほど人懐こいキャラクターの持ち主で、ヴォーカリストとしての実力も兼ね備えていた。

「REVENGE」
(1992年)

晴らしいアルバムにしたかった、ということだった。「DESTROYER」「MUSIC FROM"THE ELDER"」以来となるボブ・エズリンとの共闘もこの「REVENGE」の制作面においてプラスに働いたはずだが、志半ばにして遂ってしまった盟友に対する想いの重なりが、この作品を充実度の高いものにし、改めてバンド内の結束を強めることになった部分というのも確実にあったはずだ。

この「REVENGE」が世に出た1992年は、音楽シーンにおいて、いわゆるグランジ/オルタナティヴの台頭が著しかった時期でもある。ただ、冒頭に収められた"Unholy"に象徴されるこの作品がまとうヘヴィさやダークさは、そうした世の流れを意識したものというよりは、当時の彼らの心情の表われとみるべきだろう。ただ、このアルバムのそうした感触が時代に適合するものだったことも事実で、「REVENGE」は全米アルバム・チャートにおいて最高6位を記録している。それは、素顔での活動期突入後の作品のピークが常にトップ20界隈止まりだったことを考えれば大きな飛躍だったといえるし、6位というランキング自体が当時の彼らにとって自己最高記録だった。

また、世相と相まってダーク&ヘヴィな音楽が共感を集め、グランジ/オルタナティヴのメインストリーム浸食が進みつつあった時流に対するKISS側からの回答は、この作品と同じ布陣で1995年から1996年にかけて録られた「CARNIVAL OF SOULS」によって示されている。ご存知のとおりKISSは1996年4月にはオリジナル・ラインナップでのリユニオンを正式発表するに至っており、この音源はそれを経た1997年にイレギュラーなものとしてリリースされることになったが、まさかブルースとエリック・シンガーを擁する体制でのオリジナル・アルバムの歴史がそこで途切れることになるとは、誰も想定していなかったことだろう。

余談ではあるが、今回のジーンとポールのインタビューが実現したのは、新たなライヴ作品のリリースが控えていたからに他ならない。とはいえライヴ盤について尋ねるべきことなどきほど多くはない。だからこそ僕は今作に"Unholy"が収録されていることにかこつけて「REVENGE」に関する話、エリック・カーについての質問を投げかけてみたのだった。彼らの口から当時抱えていた感情、そして盟友に対する想いを聞くことができて本当に良かったと思っている。

20 YEARS AGO ◆ 2002
「伝説を賛美しながらの前進を可能にした新体制確立」

ポール、ジーン、エース、そしてピーター。KISSのオリジナル・ラインナップ再集結については程度が噂が立っては消えていたが、1994年にバンドがデビュー20周年を迎え、「KISS MY ASS」と命名された公式トリビュート・アルバムが発売された1994年当時には、現在のポールが言うところの「伝説を賛美しながら前進する」というスタンスが整いつつあったように思う。とはいえ「可能性が高まっている」という程度の段階では何も公表しないのが彼らのやり方である。それは過去に繰り返されてきたメンバー・チェンジなどの歴史についても同じことだ。ただ、秘密主義とまで言うと大袈裟かもしれないが、肝心のことを明かさずにおくことによって人々の関心を高め、知られざる領域への好奇心を抱かせることが可能になる。その効果を彼らは知っているのだ。

90年代のいつのことだったかは正確に記憶していないが、ジーンの口から「我々は、嘘をついたことはない。言わなくてもいいことを明かさずにきただけだ」という名言を聞いたことがある。考えてみれば個々の素顔も実性も明かさない形で動き始めた時からKISSはそうしたスタンスを貫いていたのだ。だからリユニオンの可能性が最初に芽生えたのがどの時期のことだったかを特定することは難しいが、1995年8月、MTV放映局のアンプラグド・ライヴをニューヨークで収録した際にエースとピーターをスペシャル・ゲストとして招いている時点で、その火種は確実にあったはずだ。同プログラムは同年10月に放映されて話題を呼び、翌年2月28日のグラミー賞授賞式には、4人がフルメイク&フルコスチュームでプレゼンテーターとして登場。結果、再結集とオリジナル・コンセプトに則ったリユニオン・ツアーの実施が正式に発表されたのは1996年4月16日、そのツアーが実際に開幕を迎えたのは同年6月28日のことだった。1997年1月にはその一環としての日本公演も実現している。

1998年には待望論が高まっていた「オリジナル・ラインナップによる新作オリジナル・アルバム」が制作され、同年9月、同作は「PSYCHO CIRCUS」として世に放たれている。ただ、実のところ、このアルバムには4人が均等に関与していたわけではない。「KISS KILLERS」や「CREATURES OF THE NIGHT」の制作背景がそうだったように、リアルタイムでは明かされてこなかった部分というのが確実にあった。

タイトな状態に結ばれた絆が緩む瞬間というのがオリジナル・ラインナップのKISSには繰り返し訪れている。この「PSYCHO CIRCUS」に伴うワールド・ツアーが実施されていた当時にもそうした周期が巡ってきていた。まず脱退の意思を示したのはピーターだった。記念すべき最新オリジナル作に伴うものだったはずのツアーは、いつのまにかフェアウェル・ツアーに切り替わり、2001年3月の日本公演についてもその一環としての実施となった。その頃にはすでにピーターが戦列を離れ、エリック・シンガーが彼のメイクとコスチュームを受け継ぐ形で代役を務めあげている。

本稿を書いている現在は、冬季オリンピックが北京で開催されている只中にあるが、20年前の2002年2月にはアメリカはユタ州のソルトレイクシティがその舞台となっていた。KISSは閉会式の舞台で演奏し、その模様は当然ながら全世界にリアルタイムで伝えられることになったが、その際にドラムを演奏していたのもエリック・シンガーだった。そしてその日を最後に、今度はエースがバンドを離れている。

同年3月、KISSはジャマイカのリゾート地、トレローニーでのプライヴェート・コンサートに招聘されているが、すでに離脱の意思を表明していたエースがそこに同行することはなく、その代役をトミー・セイヤーが務めている。スペースマンの姿で演奏すること自体は、BLACK 'N BLUE時代からの同胞であるジェイミー・セント・ジェイムズらと組んでいたトリビュート・バンド、COLD GINでの活動を通じて充分に経験済みだった彼ではあるが、KISSの一員としてステージに立ったのはこの時が最初だった。また、後は同年行なわれたアメリカのTV番組収録用のライヴ・パフォーマンスにもスペースマンの姿で参加している。

トミーが正式にKISSの一員としてステージに立ったのは、2003年2月にオーストラリアのメルボルンで行なわれた、オーケストラとの共演による「KISS SYMPHONY」公演の時ということになるが、その際にはすでに脱退していたはずのピーターが復帰。翌月に行なわれた日本公演についてもその布陣で行なわれている。その来日時、トミーは「求められるべき必要最低限のことを確実にクリアしながら最善を尽くすことが、今回の自分に与えられた役割だ」と謙虚な口調で語り、あくまで代役というスタンスであることを強調していたが、のちの彼は次のようにも語っている。

「俺が参加した頃というのは、KISSが元来の音楽スタイルを復活させようとしていた時期で、自分自身のミッションはエース時代のサウンドを再現し、それに磨きをかけることだった。エースはオリジナル・メンバーであるうえにあまりにも印象的なギタリストだから、当然のように比較されることになったし、熱心なKISSファンの中には俺を認めようとしない人達もいた。ただ、俺自身がファンであるだけにそうした心理は理解できたし、KISSサウンドの再構築に夢中で専念していたから、そういった声を気にしている余裕もなかったというのが本当のところでもある。(笑) そうこうしているうちに、気付いたらすでにエースよりも長きにわたってバンドに居続けていて、いまやKISS史上最も在籍歴の長いギタリストになっていたりもするんだけど。(笑)」

元々KISSのファンでもあったトミーにとって、このバンドで演奏することは、少年期からの体験や、自分の血となり肉となってきたものをそのまま有効に反映できる機会となった。それはそのままエリック・シンガーにも当て嵌まることだ。

その後、またもやピーターが離脱し、翌年実施された「ROCK THE NATION TOUR 2004」では、ふたたびエリック・シンガーが呼び戻されている。ポール、ジーン、トミー、そしてエリック・シンガー。その顔ぶれによるKISSが正式に動き始めたのが2004年であり、同年5月下旬から6月上旬にかけて組まれたジャパン・ツアーもその体制で行なわれている。ただ、現在と同じそのラインナップで初めて彼らがステージに立ったのは、今から20年前、2002年のことだったのである。あの時期こそが、現在まで続く物語の序章にあたるものだったということになるだろう。

10 YEARS AGO ◆ 2012
「元祖・怪物バンドとしての底力と意地」

今から10年前、2012年は現時点での最新オリジナル・アルバムにあたる「MONSTER」の誕生年である。ポール、ジーン、トミー、そしてエリック・シンガー。現在と同じこの布陣で制作された作品としては、2009年発表の「SONIC BOOM」に続く第2弾ということになる。

「PSYCHO CIRCUS」以降、オリジナル・アルバム制作の可能性について尋ねるたびにポールとジーンは「みんなが聴きたいのは慣れ親しんだ曲であり、新曲は誰も求めていない」といった消極的発言を繰り返してきたが、僕自身はそれを、踏めの言葉というよりもむしろファンを挑発するために発されているものと解釈してきた。実際、KISSには忠誠心の強いファンが多く、「SONIC BOOM」は全米2位、「MONSTER」は同3位という見事な実績を残している。ミリオンセラーがごく当たり前のものだった80年代などに比べれば音楽産業の規模自体が縮小傾向にあるだけに、アルバムの実売数という意味では当時に及ばないわけだが、近年の市場においてはその数字でさえ驚嘆に値するものだといえる。

KISSのように長い歴史と数多くの鉄板曲を持つバンドの場合、「新曲が求められていない」のではなく「新たな代表曲が育ちにくい」のだと僕は考えている。彼らのツアーにおいてその時点での最新アルバムから披露されるのは、80年代のノーメイク時代においても3〜4曲程度であり「何故もっとやらないのか?」と言えば「他にやらなければならない曲が多過ぎるからだ」という決まり文句のような答えが返ってきたものだ。

「MONSTER」に伴うツアーの一環として2013年10月に来日した際にも僕は、「ツアー本編とは別に、この作品の全曲が披露されるようなライヴがあってもいいのでは?」と質問しているが、「悪くないね。君のバースデー・パーティにやってあげるから聞ってくれ」「そういうライヴを観たければ「KISS KRUISE」に参加することを勧めるよ」といった回答ではぐらかされる結果となった。

ただ、新たな代表曲が育ちにくいのとは逆に、KISSが新世代のファンを獲得し続けてきたことは間違いない。2013年の来日時、ジーンは次のように語っている。

「これはもはや、単なるバンドというのを越越したものなんだ。まさにカルチャーであり、人々の人生のあり方だといえる。なにしろ結成から40年にもなるわけで、2〜3の異なったジェネレーションがオーディエンスには混在している。客席を見渡してみると、50〜60代の親達が息子や娘達と一緒に来ていて、しかもその息子が彼の子を買車していたりする光景が見受けられる。その子にとって、それは初めてKISSを観る機会になるだけではなく、父親やお袋さん達が自分と同じ曲を一緒に歌い楽しんでいることに気付かされて感動をおぼえる場にもなる。それはもはやバンドのライヴという次元のものとはいえない。現象であり、感情に訴えかけるものであり、信仰、啓発的な意味合いを持つものであり、民族性に近いものともいえる。そう、まさにこれは"電気仕掛けの教会"とでもいうべきものなんだ」

単なるライヴ、エンターテインメントの次元を超越した文化、習慣。自分達が生み出してきたものを愛しながら成熟させていくことで、KISSはこうして長い歴史と終えることのない生命力を持つことになった。KISSが過剰に独り善がりな芸術志向の罠に落ちることがなかったのは、自分達が過去に作り上げてきたものによって生かされている、という強い自覚を持っているからだろう。

だから実際、「SONIC BOOM」にしても「MONSTER」にしても過不足のない充実した作品ではあるが、自分達が作り上げてきたフォーマットに沿った作風になっているし、自らの音楽を刷新したり、時流に対する回答を音で示したりするような意図はあまり感じられない。確かにそれを求める向きは、KISSファンの総数を考えればごく少数ということになるだろうし、そうした実験や探求はKISSの看板を掲げてやるべきことではないのかもしれない。ただ、ポールの言う「伝説を賛美しながら前進する」ということを本当に実践するならば、そうしたことも不可欠なのではないだろうか。

2012年のKISSは完全に安定期に入っていたといえるし、「END OF THE ROAD」のようなファイナル・ツアーの具体的構想まではまだ抱えていなかっただろうが、「終わり方」についてはすでに考え始めていたはずだ。それから10年を経た現在、我々の知る形でのKISSの歴史は確実に終末に近付きつつある。それは誰にも否定できないことだ。

ただ、その先に、まだ我々が知らずにいる形でこのバンドが継続する可能性があることは、意識の隅に置いておきたい。ポールもジーンも、重い衣装を身につけて大規模なショウをやり続けることの困難さを繰り返し語り、ライヴ・バンドとしての存続に限界があることを強調しているが、「Tシャツにジーンズ姿でいいのであれば90歳でもできる」というポールの発言が本心だとするならば、KISSのオリジナル・コンセプトから逸脱した形式でのライヴ活動継続には可能性があるはずだし、ライヴ活動を止めると言ってはいても、二度と作品を作らないとは誰も言っていないのだ。

2012年はあくまで「MONSTER」の発表年として記憶されるべき年であり、「KISSが最後のオリジナル・アルバムを発表した年」にはならない可能性がまだ残されている。僕はそう信じている。■■

「MONSTER」
(2012年)

恒例アンケート企画

私の好きなKISSのベスト5曲

ライヴ・アーカイヴ・シリーズの第二弾をリリースするKISS。70年代から近年に至るまで多くの少年少女達をロックの世界へと導いてきただけに名曲は死ぬほど沢山あるわけでして、果たしてその中から、本誌ライター陣と編集部員はどんな"好きな5曲"を選んだのでしょうか…？

構成●編集部

YOU MASUDA

1. **King Of The Night Time World**（「DESTROYER」1976年）
2. **Danger**（「CREATURES OF THE NIGHT」1982年）
3. **I'll Fight Hell To Hold You**（「CRAZY NIGHTS」1987年）
4. **Psycho Circus**（「PSYCHO CIRCUS」1998年）
5. **God Gave Rock'N'Roll To You II**（「REVENGE」1992年）

★すみません、CHICAGOじゃないけど素直になれなくて。KISSの膨大な楽曲の中から5曲選ぶとなれば欠かせないものは多々あるし、両巨頭がヴォーカルを分担する曲が大好物な自分としては"Shout It Out Loud"などを選出して然るべきところですが、突発的に聴きたくなった曲をランダムに挙げていったらこのような不思議な並びになりました。5はARGENTのヒット曲の続編みたいな趣向のカヴァーだし、1もTHE HOLLYWOOD STARSの楽曲が改造されたもの。そして気付いてみれば偶然にも、他3曲もメンバー以外の人物が共作者として名を連ねているものばかりだった。ただ、作曲クレジットにアダム・ミッチェル（2 3を共作している作曲家。オリビア・ニュートン・ジョンやジョン・ウェイトなどにも曲を採用されている）などの名前を見つけると「おっ！」と思わされるのも事実。あと、首振りDollsのライヴの最後に5が流れる瞬間が大好きです。

YOSHI HIRANO

1. **Exciter**（「LICK IT UP」1983年）
2. **I'm Alive**（「ASYLUM」1985年）
3. **I've Had Enough (Into The Fire)**（「ANIMALIZE」1984年）
4. **Unholy**（「REVENGE」1992年）
5. **Lick It Up**（「LICK IT UP」1983年）

★最終的に四半世紀以上に及んだメイクアップ&コスチューム復活体制での活動（懐古対象である最初のメイクアップ時代よりはるかに長い！）を通じてKISSはバンド・ヒストリーのさまざまな名場面を現代に呼び起こしながら時空を超えたバンドの価値と独自性をアピールし続け、重さ妖しさから人懐こさ軽快さまでを網羅した70年代KISS楽曲の多様多彩な魅力の再評価気運を大いに高めてきた。そんなKISSの自己再定義モードの終点が見えてきたいま、唯一の心残りは、その自発的再評価の対象がノーメイク期まで到達しないまま終わってしまいそうなこと。80年代から90年代初頭、既に名誉も評価も勝ち取ってヴェテラン大物スターの立ち位置にあった彼らが果敢に同時代HM/HRのイメージに挑んで到達した独自の「KISS流ヘヴィ・メタル」の覇気とバースト感もまた70年代楽曲と同等以上の独特な魅力を放っているのに。よってここは素顔時代縛りで5曲！

KYOSUKE TSUCHIYA

1. **Detroit Rock City**（「DESTROYER」1976年）
2. **Rock And Roll All Nite**（「DRESSED TO KILL」1975年）
3. **I Was Made For Lovin' You**（「DYNASTY」1979年）
4. **Love Gun**（「LOVE GUN」1977年）
5. **Shout It Out Loud**（「DESTROYER」1976年）

★振り返ると、TVで目にした"Heaven's On Fire"のビデオ・クリップがKISSの音楽を聴くようになる最初のきっかけだったはずで、「ANIMALIZE」「ASYLUM」「CRAZY NIGHTS」辺りはリアルタイムで楽しんでいた作品。80's らしい"Reason To Live"は名曲の1つだろう。当時は"Tears Are Falling"はギターのコピーもした。ただ、それ以上に初期のメイク時代のマテリアルに惹かれるようになったのが正直なところ。過去のカタログは一時期に集中して遡ったわけではないものの、「ALIVE II」を通して幅広く耳にしたことが大きいかもしれない。今回挙げた5曲は1997年発売のベスト盤「GREATEST KISS」にも収録された有名曲ばかりだが、いずれにも共通するのは、インパクトのあるイントロ・フレーズがあり、メロディを含めてキャッチーである点。彼らのヴァリエーションのある魅力がわかる。その意味で他にセレクトしたかった筆頭は"Deuce"。

JUN KAWAI

1. **I Want You**（「ROCK AND ROLL OVER」1976年）
2. **I**（「MUSIC FROM "THE ELDER"」1981年）
3. **King Of The Night Time World**（「DESTROYER」1976年）
4. **Forever**（「HOT IN THE SHADE」1989年）
5. **Sure Know Something**（「DYNASTY」1979年）

★KISSに夢中になるきっかけとなったのが、小学生の時にTV番組「ぎんざNOW!」の洋楽ヒット・チャート・コーナーで"I Want You"のMVを観た時だった。曲、演奏している姿、火柱が上がるステージの様子に衝撃を受けて、親に「ROCK AND ROLL OVER」のLPを買ってもらったものだが、その思い出のナンバーを1位にした。2位の"I"はひょっとしたら曲としては一番好きかもしれないが、スタジオ・ライヴのようなMVが印象的な曲として心に焼き付いている。"King Of The Night Time World"は「ALIVE II」の迫力のあるテイクが好きなので選んだ。"Forever"はメロディとポール・スタンレーの歌が最高のバラードで、"Sure Know Something"はとにかくサビが好きな曲だ。他に選ぶとしたら、"Firehouse" "100,000 Years" "Got To Choose" "Calling Dr. Love" "Shandi" "Who Wants To Be Lonely"などだが、正直、ライヴの定番曲は全部選びたいくらいだ。

AKIHISA OZZAWA

1. **Deuce**（「ALIVE!」1975年）
2. **Love Gun**（「LOVE GUN」1977年）
3. **Hard Luck Woman**（「ROCK AND ROLL OVER」1976年）
4. **God Of Thunder**（「DESTROYER」1976年）
5. **Detroit Rock City**（「DESTROYER」1976年）

★初コンタクトはNHKの「ヤング・ミュージック・ショー」。お袋が「うわーオバケオバケ」と眉をひそめていた。僕は10歳になっていたはずだが、すでに日本で大人気だったBAY CITY ROLLERSよりは自分向きかなとは思ったものの夢中になるほどではなく、いい曲を書くなあ、カッコいいなあと思えるようになったのは、やはり80年代に入ってから。すでにその時期の彼らは落ち目だったので、あくまで僕にとってのKISSは"70年代にブイブイ言わしてたバンド"であって、選曲も熱い黄金期のものばかりとなる。1のオリジナル収録は1st「KISS」（1974年）だが、ご多分に漏れず好きなのは「ALIVE!」のヴァージョン。そもそも「ALIVE!」のなかでもこの曲のプレイが一番カッコいいと思う。泣く泣く次点に落としたのは"Beth" "Calling Dr. Love" "Do You Love Me"など。スタジオ・アルバムで好きなのはやっぱり「DESTROYER」となる。

VEPPY BEPPU

1. **I Love It Loud**（「CREATURES OF THE NIGHT」1982年）
2. **Rock And Roll All Nite**（「DRESSED TO KILL」1975年）
3. **Forever**（「HOT IN THE SHADE」1989年）
4. **Black Diamond**（「KISS」1974年）
5. **Psycho Circus**（「PSYCHO CIRCUS」1998年）

★さて、困った。KISSに関してはそれ程熱心に聴いてきた覚えはなかったのだが、曲を選ぶ段階になったらあれもこれも良い曲だよなと。こんなことを言ったらファンの方には怒られるかもしれないが、KISSの楽曲には馴染みの町中華にも似た魔力がある。町中華の定義が「安い、美味しい、ボリューム満点、居心地抜群、大衆的」とのことだが、キャッチーかつポップなメロディを内包したKISSの明快なハード・ロックは私の中では通じる部分が多い。あれもこれも鉄板で安定の美味しいメニュー。さてどれを選ぼうか？　そんな感じなので今日はこの気分で5曲選びました。多分、明日になるとまた違ったセレクトやランキングになると思います。1は会場一体となる盛り上がりがたまらない。某レスラーの入場曲でもありましたね。2は文句なしのパーティ曲。3はエリック・カーとダブり涙。4は少しダークで劇的な展開に痺れる。5はライヴで聴いて惚れました。

KAZ HIROSE

1. **Rock And Roll All Nite**（「DRESSED TO KILL」1975年）
2. **Tears Are Falling**（「ASYLUM」1985年）
3. **God Gave Rock'N'Roll To You II**（「REVENGE」1992年）
4. **I Was Made For Lovin' You**（「DYNASTY」1979年）
5. **I Stole Your Love**（「LOVE GUN」1977年）

★リアルタイムで言うと、KISSが初来日した1977年頃はRAINBOWに夢中で、NHKの「ヤング・ミュージック・ショー」もKISSの回は観ていない。「ヤング・ミュージック・ショー」と言えば僕にとっては1978年の"ミュンヘンのRAINBOW"だった。勿論RAINBOW以外にもあれこれレコードを買いまくったけれども、なかなかKISSには到達せず。そんな僕がリアルタイムでKISSをちゃんと聴くようになったのは80年代に彼らがメイクを落とし、HM/HRブームの中で"米国HM/HRの大物"としてMTVでさかんに露出されるようになってからだった。なのでノーメイク時代の楽曲が凄く好きだったりする。中でも2は最高のお気に入り。（ビデオクリップ思い出しますねえ）　4を選ぶのもファンからすれば邪道かもしれないけどいい曲なので一。初期の名曲では1以外にも"Deuce"とか"Cold Gin"とか好きな曲は沢山ありますが、あえて選ぶなら5。文句なくカッコいい！

TACK MAEDA

1. **Black Diamond**（「KISS」1974年）
2. **Love Gun**（「LOVE GUN」1977年）
3. **Strutter**（「KISS」1974年）
4. **I've Had Enough (Into The Fire)**（「ANIMALIZE」1984年）
5. **Naked City**（「UNMASKED」1980年）

★2は僕にとっての洋楽の入り口になった最重要曲だが、その後1を聴いてさらに大きな衝撃を受けた。KISS史上最もドラマティックな曲だ。1～3に関しては、スタジオ版ではなく「ALIVE!」（1975年）、「ALIVE II」（1977年）収録のライヴ版ばかり聴いていた。より迫力があるし、アレンジもカッコいいからだ。「ALIVE!」収録の1の2番はピーターの絶叫にも似た歌い方が最高！）　KISSのライヴはあの派手なステージの絵がなくても音だけで興奮出来る。生粋のライヴ・バンドだ。素顔時代の曲では、勇壮で緊迫感があってメタリックな4が一番好き。5はダークでメランコリックで曲自体も好きだが、生まれて初めてベースで耳コピした記念すべき曲でもある。しかしKISSはSCORPIONSよりも難しかった。"I'm A Legend Tonight" "I Stole Your Love" "C'mon And Love Me" "God Of Thunder" "Lick It Up" "I Still Love You" "Easy As It Seems" …とリストは延々と続く。

YUMIKO HABA

1. **Detroit Rock City**（「DESTROYER」1976年）
2. **Love Gun**（「LOVE GUN」1977年）
3. **Tears Are Falling**（「ASYLUM」1985年）
4. **I Was Made For Lovin' You**（「DYNASTY」1979年）
5. **God Gave Rock'N'Roll To You II**（「REVENGE」1992年）

★私がHM/HRを聴き始めた80年代末のKISSはノーメイクでやや地味な存在で、当時の新譜よりも好んで聴いていたのは主に1988年のベスト盤「SMASHES, THRASHES & HITS」。1はゾクゾクするイントロのリフ&ドラミングからヴァースの小気味いいベース・リフ、熱いシャウト、華麗フレーズにもう1本のギターがハーモニーを重ねるソロまで、随所に"カッコいい"が詰まっている名曲中の名曲。2もイントロから気分がアガる曲で、ポール・スタンレーが滑車に乗って観客と後方の別ステージに飛んでいく姿が思い浮かび、自動的に2006年の富士山麓で観た伝説のフェスでのあの気まずさも思い出されて胸がドキドキ～。Voとしてはポール派なので彼が歌う曲中心のセレクトですが、ライヴでは勿論ジーン・シモンズの歌う曲も"来た～！"と盛り上がるのが多いし、ドラマーが歌う"Beth"や"Hard Luck Woman"等の普遍的魅力を放つ極み系バラードも素敵。

TAKA OKUNO

1. **Black Diamond**（「KISS」1974年）
2. **Detroit Rock City**（「DESTROYER」1976年）
3. **Love Gun**（「LOVE GUN」1977年）
4. **Strutter**（「KISS」1974年）
5. **Parasite**（「HOTTER THAN HELL」1974年）

★僕が彼らを知ったのは80年代半ば。「知った」と言ってもレコードを買うことはなく、小遣いが足りないスラッシュ小僧としては「音楽番組でビデオを見かける人達」という受け止め方だった。ANTHRAXやDEATH ANGEL等によるカヴァー曲で興味を持ちはしたけれど、初めて彼らのレコードを買ったのは大学に入ってからのこと。90年代前半、音楽業界は空前のCD化ラッシュにより色々なバンドの旧譜中古LPが数百円という安値で投げ売りされていた。で、1stアルバムのUS盤を中古で買ったのだけれど、その盤のB面には明らかにKISSではないバンド、カントリー・ロックみたいなバンドによる曲で占められていて頭の中が「?」で埋め尽くされた。そのバンドはニューメキシコ出身のSQUEEZERという人達で、当時ミスプレス盤として市場に数百枚出回ったものだと知ったのは今の仕事に就いてからのことだった。某国のKISSコレクターに譲ったので今は手元にないのだが。余談でした。

KISS®

PAUL STANLEY(Vo/G), GENE SIMMONS(B/Vo), ERIC SINGER(Dr/Vo), TOMMY THAYER(G/Vo)

地獄の軍団、オフィシャル・ブートレグ・シリーズ第2弾!!

ポール・スタンレー、ジーン・シモンズ、エリック・シンガー、トミー・セイヤーという
現在のラインナップによるKISS初の全米フル・ツアーとして注目された〈ロック・ザ・ネイション・ツアー〉から
2004年7月25日の米国ヴァージニアビーチ・アンフィシアター公演の模様を収録!!

3.11 ON SALE

オフ・ザ・サウンドボード:
ライヴ・イン・ヴァージニアビーチ 2004

キッス 検索

日本盤のみSHM-CD仕様　2CD　UICY-79923/4　¥3,960(税込)

UNIVERSAL

International / USM, A UNIVERSAL MUSIC COMPANY. Marketed & Distributed by UNIVERSAL MUSIC LLC

BURRN! 2022.4

2022年3月5日発行・発売(毎月5日発行・発売)　第39巻・第5号・通巻552号

発行人　草野夏矢　編集人　広瀬和生

シンコーミュージック・エンタテイメント

定価1,000円 本体909円　雑誌17501-04

Printed in Japan

4910175010420
00909